20055

当院における小血管新規病変に対するDCBの検討

【はじめに】薬剤溶出バルーン(DCB)はバルーン表面に新生内膜の増殖を抑制するパクリタキセルが塗布されており、バルーンを拡張することで血管壁に薬剤を付着させ、再狭窄を予防するとされている。現在では、ステント内再狭窄(ISR)のPCIにおいて標準的治療方法となっており、2016年6月より対象血管径が3.0mm未満の新規病変に対しても使用可能となった。【対象および方法】2016年6月から2018年12月までに、2.5mmまたは2.0mmのDCBを用いて新規病変を治療した48症例のうち8か月後にCAGを行った19症例に対し、PCI前、DCB拡張後、8か月後の対象血管径(reference)及び病変部の最小血管径(MLD)、狭窄率(%DS)による検証を行った。【結果】PCI 前の Reference は 2.28(mm)、MLD は 0.40(mm)、%DSは82.54(%)。DCB拡張後のReferenceは2.34±0.27(mm)、MLDは1.88(mm)、%DSは18.93(%)であった。8ヶ月後のReferenceは2.31(mm)、MLDは1.46(mm)、%DSは36.80(%)となった。またAcutegainは1.79(mm)、LateLossは-0.42(mm)であった。【結語】当院での小血管病変や末梢分岐部病変などにDCBを施行した例においては、その術後の成績は良好であった。